

三次元全点ドット情報システムによる縄紋集落の分析に向けて

小林謙一・矢嶋良多・小澤政彦

三次元全点ドット情報システムとしてのデータベース

集落調査における全点ドット記録は、集落分析に有効である。全点ドットを有効に利用するには、遺物管理データベースとして整備する必要がある。データベースによって、遺物情報を検索できるのみならず、検索によって抽出された遺物の空間的分布状況を動的に示すことが可能となる。本研究は、大日野原集落調査時から三次元位置・付随情報を収集した遺物位置情報を、横断検索データベースとして運用することで、縄紋集落形成過程を解析することを目標とする。本報では、大日野原遺跡の重複住居跡群の遺物ドットを用いて、遺跡内遺物分布情報シミュレーション、遺構内埋没過程の復元を行うことを目標とし、そのために適した遺物整理・管理用のデータベースを構築する。

大日野原遺跡 SI-02 の分析

SI-02 住居跡を中心に分析する。まず、土器片重量階級別出現頻度について、5g 毎の階級別破片数を見ると、5-10g の破片が最多で、10-15g、20-25g、15-20g の順で続き、45g 以上の破片は極端に少なくなる (図4)。住居出土土器の大半は小破片である。次に型式別に検討する。土器片の型式は、勝坂1式・阿玉台式、勝坂2式、勝坂3式、加曾利E1式、同E2式・連弧文系土器、加曾利E3式、加曾利E4式、曾利I式、同II式、同III式、同IV式、同V式、不明に区分した。SI-02号住居は埋裏に新地平編年12a期と捉えられる加曾利E3式土器を埋設し、覆土中層上面に新地平編年11c～12a期に相当する曾利III式・加曾利E3式古段階に並行する大破片を含む土器群が一括廃棄されていた住居跡であるが、型式別出土破片を見ると、勝坂式土器が相当量出土している。型式別破片数でみた場合と型式別総重量で見た場合とでは大まかな組成は同様であるが、傾向が異なる。破片数では勝坂式が29%を占めるのに対し、重量で集計すると20%と相対的に減少する (図5)。型式別の平均破片重量としてみると、勝坂式期で19.81g、加曾利E式34.56g、曾利式31.94gとなり、勝坂式土器が小破片であることを反映している (図6・7)。

次に、住居上層 (1層)、中層 (2層)、下層 (3・5層)、床面付近 (4・6・10層) に分けて出土分布を検討する。上層は比較的少なく中層に最も多く、下層も比較的多い (図8)。勝坂式土器が小破片で床面から上層まで、一定量が含まれていることは、土壌の中に住居構築時より古い土器片が包含されており、土壌とともに住居跡地へもたらされたと考えられる。住居構築から廃絶の時期と考えられる曾利III・IV式期の土器片は住居南東部に中層において集中し、一括廃棄面を作っていると捉えられる (図9・10)。

竪穴住居覆土の埋没状況

上、住居覆土中の土器破片の分布から、①住居構築時よりも古い土器片が、特に小破片の状態に住居覆土全体に混在する、②SI-02 覆土中層下面の遺物集中は、住居廃絶時に近いと考えられる曾利IV式期の一括廃棄を主体とするが以前の時期の土器片も含み、片付けや2次廃棄などの可能性を示唆する、③住居構築時の破片は床面上にも認められるが、覆土中にも廃棄される状態で集中して出土する、などの諸点が指摘でき覆土中一括遺物の性格や住居ライフサイクルに大きな示唆を示す。全点ドットとその分析は、考古学的基礎データとして重要である。本報では接合関係の分析に及ばなかったが、今後検討を進める。



図1 A調査区掘り上がり (南西から)

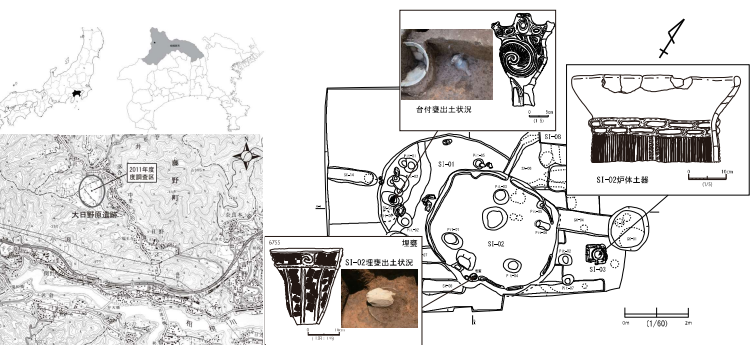


図2 大日野原遺跡の位置

図3 A調査区平面図

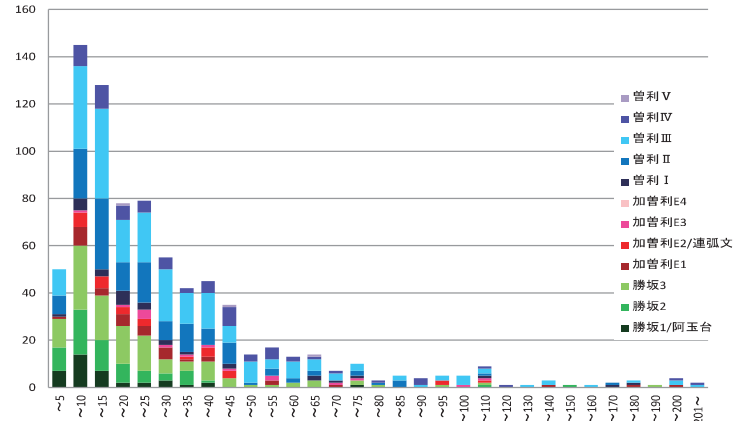


図4 土器片重量階級別出現頻度

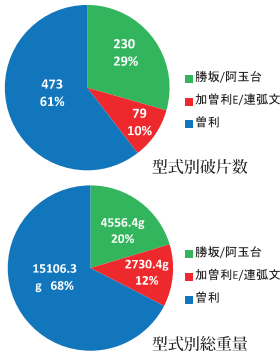


図5 型式別破片数・総重量

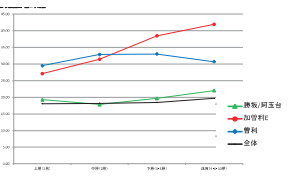


図6 型式別平均破片重量

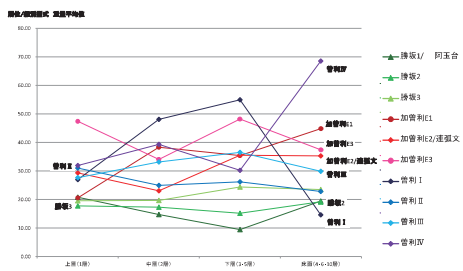


図7 型式別平均破片重量 (細別型式)

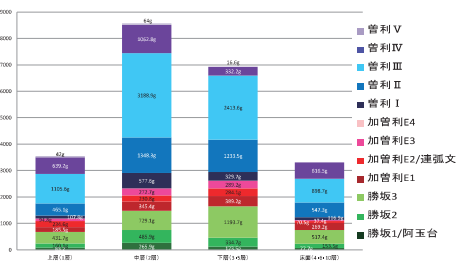


図8 層位・型式別出土量

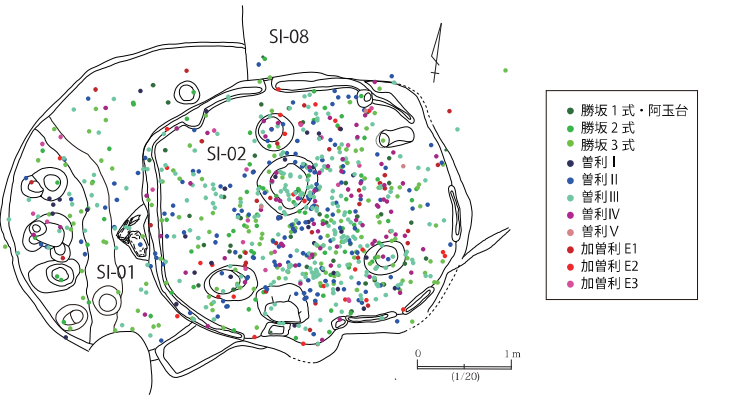


図9 SI-01・02 住居跡 型式別出土状況

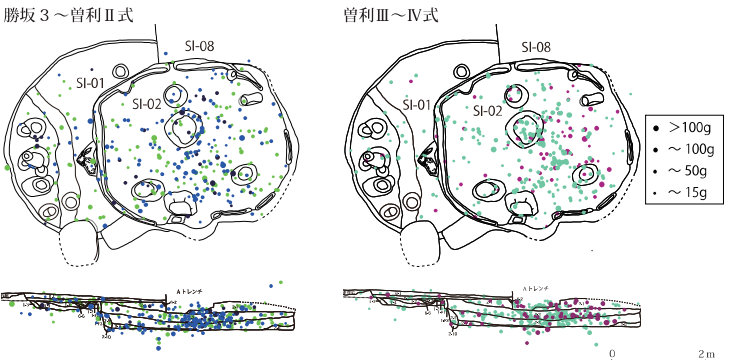


図10 SI-01・02 住居跡 型式・重量別出土状況

本稿は平成22～24年度科学研究費補助金C「炭素14年代測定による縄紋集落の研究」(代表小林謙一)、2012年度中央大学特定課題研究及び中央大学文学部考古学研究室と相模原市教育委員会の大日野原遺跡共同研究の成果を含む。